

「神の停止線」

記入者：ラプタハイブン



寛治が書いた「イキリち○ぽマン」の話は、どこの飲み屋で誰と話したときでもほぼ100%笑いが取れる。もはや伝説の一夜となっている。彼は終始ヘラヘラしていて、凍結した峠に女子を連れ込んで事故させてしまった責任感など微塵も感じていない様子だった。「責任感が強くてしっかりしているより、これぐらいヘラヘラしていて中途半端な方がモテたりするのかな」と運転しながら考えていた。「おまえ硬いねん。重いねん。もうちょい肩の力抜け」など、学生時代に先輩方から適切な指導を受けてきた身なので、彼と自分の間にも一本の軸があって、自分が力を抜ききって、我が無くなったあかつきには彼のようになるのかなとも思った。清潔な印象だったし、ヘラヘラ笑う笑顔もなかなか素敵で、こんな風になってみたいなど少し思ってしまった。そのとき不覚にも「イキリち○ぽマン」に対して憧れを抱いていたのだ。

仲間と音楽制作を続ける日々は楽しくて、この先もやめられそうにない。でも一方で、ずーっと何かに追われている感じがする。それが10代からずっと続いている。どれだけ音楽を楽しんで作り、作業に慣れ、人から評価を得ようとも心の中から「～しなければいけない」が全て消えることはない。常に時間が欲しくて、常に一人になりたい。いっそのこと制作やめてやるぜと決め込んでみても何もしない休日3日も続けばまた楽器を触り始めるのだから、追跡者からは逃れられそうにない。そのためか、束縛(というか追ってくる何かの存在)のない人と触れ合うと、羨ましく思うし、その生き方に憧れてしまう。そういう自由な人と話すのは、それだけで自分も自由を得られる気がするし好きだ。制作を続ける上で精神は追われていても、生活をトータルで、あくまで長い尺で考えて、ゆとりを保っていきたいと思う。焦りは大敵だから。焦りは人を変えてしまうから。

連休は海に行きたかったけど、台風に阻止されてしまった。お盆も海に行きたいけど、ぼちぼちクラゲが出るのでプールか川に行こうかなと思案中。晴れたら山の散策やサイクリングも楽しい。雨が降ったら室内でモノポリーをするか幽々白書を見たい。長期休暇もなくカレンダー通りなので、気分の違いだけで遊びに使える時間は普通の週末と大差なしかも。クルーで集まってバーベキューがしたいけど、コロナの状況を見るとまだ難しいかな。

ソロアルバムを作っていて、歌パートの録音で詰まっている。客のボーカル編集は得意なのに、自分の歌パートとなるとまったく進まなくなる。不完全な作品の完成を阻む自分の中のフットブレーキ、「神の停止線」が作用しているからだ。ラップし始めたころには自分でも嫌というほど経験したし、初作品を制作する客が編集や再録音に時間を費やすのは「神の停止線」を目前にしているからである。きっと一歩進めば楽に百歩先まで進む。躊躇するのは上手い下手、人の耳を気にするからだ。歌手を目指しているわけでもないのに、自分の表現ができればそれでよしとして先に押し進むことにする。もののけ姫のアシタカのように弓を引きながら「押し通る！」と言って作業を進める。